

Title	アドバイス表現が受け手の認知・感情・行動改善意欲に及ぼす影響
Author(s)	真下, 知子
Citation	
Issue Date	
Text Version	ETD
URL	https://doi.org/10.18910/76344
DOI	10.18910/76344
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

論文内容の要旨

氏名 (真下 知子)

論文題名 アドバイス表現が受け手の認知・感情・行動改善意欲に及ぼす影響

論文内容の要旨

本研究の目的は、日本の大学生を対象にアドバイス表現を収集・分類したうえで、アドバイス表現の違いが受け手の認知、感情、行動改善意欲に及ぼす影響を明らかにすることであった。また、視点取得への働きかけが他者の行動に対する認知や発話産出に与える影響について探索的な検討を行ない、アドバイス表現の改善をめざす教育的介入への手がかりを得ることとした。この目的に対して、本論文では2章から6章までの各章において一連の研究を行なった。

第1章：序論

第1章では、アドバイスが相互援助のための重要な発話であり、大学生にとっても生活面、学業面において互いに効果的なアドバイスを行なう必要性があることを述べ、国内外におけるアドバイスに関する先行研究を整理した。アドバイスの評価や効果に影響を与える要因は多様であるが、その中で、受け手の受容度に大きく影響する要因の一つが「どのように伝えるか」というアドバイス表現であり、わが国においてはまだ十分に検討されていないアドバイス表現が受け手に与える影響について検討する必要性を述べた。

第2章：アドバイス場面の収集と場面特性に関する検討（研究1）

第2章では、日本の大学生が日常経験するアドバイス場面の収集と分類を行い、場面特性が彼らのコミュニケーションに与える影響を検討した。分類で得られた上位カテゴリーより、課題、グループワーク、髪型、マナーの4つの場面を設定し、アドバイスする側の行動義務、心理的負担感について評定を求めた結果、マナーが他の3場面よりも行動義務が低く、グループワークは髪型や課題の場面よりも心理的負担感が高かった。また、自発的にアドバイスするよりも、返答する方が心理的負担感は低いことが明らかとなった。このように場面や条件によって、アドバイスする側の行動義務や心理的負担感が異なることが示唆された。

第3章：アドバイス表現の収集と分類（研究2）

第3章では、研究1で収集した場面より、特徴の異なる2場面（課題・グループワーク）を取り上げ、送り手が伝えた情報は同じでも、どのような種類の表現が用いられるか、アドバイス表現の収集と分類を行なった。結果として、アドバイス表現は「指示」「提案」「ヒント」「欠点の指摘」の4カテゴリーに分類された。場面によって用いられるアドバイス表現に違いがあるかを検討するため、アドバイス表現(4)×場面(2)の χ^2 検定を行なったが差は認められなかった。

第4章：アドバイスの口頭産出と筆記産出の比較（研究3、研究4）

友人間におけるアドバイス表現が受け手に与える影響を検討するにあたり、その前段階として研究1では場面の収集、場面の評定、研究2では言葉かけの収集を行なった。これら一連の研究では、主に会話形式のシナリオを用いた質問紙実験により、想定場面での発話収集を筆記形式で行ってきた。しかし、実際のコミュニケーションは口頭で行うため、口頭で話す場合と質問紙上に筆記する場合とでは、発話内容が異なることも考えられる。そこで、研究3（予備的検討）および研究4（実験）では、実験参加者を口頭群と筆記群に分け、両群で産出される発話に量的、質的な差があるかを検討した。その結果、研究3、4ともに両群で産出された発話には量的にも質的にも差は認められず、筆記による発話収集でも、口頭によるものとほぼ同等の結果が得られることが示唆された。

第5章：アドバイス表現が受け手の認知・感情・行動改善意欲に与える影響（研究5）

研究5では、研究2で得られた「指示」「提案」「ヒント」「欠点の指摘」の4つのカテゴリより、代表的な4種類のアドバイス表現を実験刺激とし、性質の異なる2場面（協同場面・課題場面）を設定して、受け手による発話意図の認知、喚起される感情、行動改善意欲の違いを検討した。その結果、発話意図の認知および喚起される感情に関しては、「提案」または「ヒント」の表現がポジティブに受け止められやすく、「欠点の指摘」が最もポジティブに受け止められにくいことが明らかとなった。アドバイスの受け手が送り手の意図をポジティブにとらえ、ポジティブな感情を喚起させるためには、相手がどのように行動すべきかを直接的、具体的に伝え、かつ受け手の意思を尊重する「提案」か、間接的な表現で相手に行動の問題点を気付かせようとする「ヒント」を用いるのが望ましいと考えられる。「欠点の指摘」はどの場面であってもネガティブな認知と感情をもたらす可能性が高く、避けるべきであると言えるであろう。一方、行動を改善しようとする意欲については「ヒント」の表現が最も効果が低かった。行動改善意欲を高めるには、間接的な表現よりも、何が問題であるのか、どのように行動すべきかが明確に伝わる表現の方が効果的であることが示唆された。

第6章：視点取得を促す介入教示が他者の言動認知と発話産出に与える影響（研究6，研究7）

第6章では、アドバイス表現の改善に向けた教育的介入への手がかりを得ることを目的として、視点取得への介入教示が他者の言動認知およびアドバイス産出に及ぼす影響を検討した。研究6では、他者の視点に立ってその心情を推測させる「相手視点群」と自分自身の視点で他者の言動を評価させる「自己視点群」を設定し、他者の言動認知およびアドバイス表現の産出について自由記述による回答を求めた。その結果、両群において多様な言動認知がなされており、自己視点群ではポジティブな認知よりネガティブな認知に該当する記述の割合が多かった。しかし、群間でアドバイス表現の種類には差が認められなかった。

研究7では、「相手視点群」「自己視点群」の他に「統制群」を設け、言動認知については共通の質問項目に対する回答を、アドバイス表現については選択肢による回答を求めて検討を行なった。言動認知については、研究6の結果と異なり、群間で差は見られなかった。質問項目においてポジティブな認知とネガティブな認知の両方が示されたことが実験参加者に多面的に考える機会となり、認知が調整された可能性が示唆された。発話産出についても、研究7では、相手視点群と統制群の間で「ヒント」の発話、および間接的な表現の使用に差が認められ、統制群では「ヒント」および間接的な表現の使用が有意に多いという結果であった。研究5で「ヒント」の表現が行動改善意欲の喚起には最も効果が低かったこと、先行研究より、間接的要求の使用には利己的な目標があると考えられることをふまえると、相手視点群では、利己的な目標よりも受け手の利益を考え、とるべき行動を明確に伝えようとする直接的な表現の使用が多くなったと推測できる。しかし、この点についてはアドバイス表現の選択の背景にどのような思考や感情が働いたかについて、今後、インタビュー等を含めたさらなる検討が必要である。

第7章：総合考察

本研究では、わが国において大学生から収集した場面とアドバイス表現を用いて受け手の認知、感情、行動改善意欲に及ぼす影響を検討し、求める行動は同じであっても、アドバイス表現によって、受け手の反応が異なることが明らかとなった。本研究は、女子大学生に限定したものではあるが、言葉の表現の違いによって、受け手の反応が異なることから、適切なアドバイス表現についての示唆が得られたことは意義深い。これは、相手と円滑なコミュニケーションを行なうためには、伝える内容（何を伝えるか）のみならず、情報表現のあり方（どのように伝えるか）が重要であることを示している。本研究で得られた知見は、彼らのアドバイス表現の工夫およびコミュニケーションの改善に寄与すると考えられる。

今後の課題としては、聞き手の行動改善意欲を高め、かつポジティブな認知や感情の生起を促すため、複数の表現を用いた場合の効果やその順序が受け手の受容反応に及ぼす影響について実証していくことが挙げられる。また、アドバイス表現の改善に向けた教育的介入をめざし、視点取得への介入教示が他者の言動認知と発話産出に及ぼす影響について、さらに検討することが求められる。今後、複数回による介入を行い、介入教示が言動認知と発話産出のそれぞれに与える影響のみならず、言動認知と発話産出の関連や、アドバイス表現の選択の背景にある思考や感情等についても検討することが望まれる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (真 下 知 子)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授 西森 年寿
	副 査 教 授 岡部 美香
	副 査 教 授 齊藤 貴浩
	副 査 外部審査委員 三宮 真智子

論文審査の結果の要旨

本論文は、相互援助に重要な役割を果たすアドバイスの発話が効果的に行なわれることを目指すものであり、アドバイス表現の違いが受け手の認知・感情・行動改善意欲に及ぼす影響を明らかにし、場面や状況による違いをふまえて、より良いアドバイス表現の産出に向けたアプローチを示したものである。

第1章では、国内外におけるアドバイスに関する先行研究のうち、アドバイスの効果に大きな影響を及ぼすアドバイス表現に焦点化して、研究成果や課題が整理された。また、わが国において大学生が経験する場面や実際に用いる表現を収集したうえで、アドバイス表現が受け手に与える影響を明らかにする必要性が指摘された。

第2章では、大学生を対象にアドバイス場面の収集と分類がなされ、場面特性が彼らのコミュニケーションに及ぼす影響が検討された。学業面、生活面、人間関係等、多様なアドバイス場面が収集され、場面や状況によってアドバイスする側の行動義務や心理的負担感が異なることが示唆された。

第3章では、大学生を対象にアドバイス表現の収集と分類が行われた。その結果、送り手の意図は同じであっても多様な表現が産出され、それらは「指示」「提案」「ヒント」「欠点の指摘」の4カテゴリーに大別された。

第4章では、想定場面での発話収集を行うにあたり、口頭で話す場合と質問紙上に筆記する場合とで産出される発話に量的、質的な差があるかが検討された。その結果、口頭群と筆記群の両群で産出された発話には量的にも質的にも差は認められず、筆記による発話収集でも口頭によるものとはほぼ同等の結果が得られることが示唆された。

第5章では、「指示」「提案」「ヒント」「欠点の指摘」の4つのカテゴリーより、代表的な4種類のアドバイス表現を実験刺激とし、性質の異なる2場面を設定して、受け手による発話意図の認知、喚起される感情、行動改善意欲の違いが検討された。結果として、求める行動は同じであっても、アドバイス表現によって、受け手の反応が異なることが明らかになった。場面によって違いがあるものの、発話意図の認知および喚起される感情に関しては、「提案」または「ヒント」の表現がポジティブに受け止められやすく、「欠点の指摘」が最もポジティブに受け止められにくいことが明らかになった。一方、行動を改善しようとする意欲については「ヒント」の表現が最も効果が低く、行動改善意欲を高めるには、間接的な表現よりも、何が問題であるのか、どのように行動すべきかが明確に伝わる表現の方が効果的であることが示唆された。

第6章では、アドバイス表現の改善に向けた教育的介入への手がかりを得ることを目的として、視点取得への介入教示が他者の言動認知およびアドバイス産出に及ぼす影響が検討された。言動認知については一貫した結果が得られなかったが、発話産出については、相手視点群と統制群の間で差が認められ、相手視点群において間接的な表現の使用が有意に少ないという結果が得られた。これは、視点取得への介入が発話産出に与える影響を示すものであり、今後さらなる検討を経て介入への発展が期待される。以上の研究結果をふまえ、第7章では本研究の意義および本論文の限界と今後の課題が論じられた。

本論文は、わが国の大学生から収集した場面および表現を用いて、同じ発話意図であっても表現の違いによって受け手の反応が異なることを示したという点で独創的である。また、アドバイス表現の改善に向け、他者の視点取得に着目した介入の可能性を検討しているという点で挑戦的であると評価できる。

以上より、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。